

Steel Landscape

鉄の点景



文鎮と書の世界

文鎮は英語では paperweight、つまり紙のおもしである。機能的には確かに紙のおもしに過ぎないが、「文鎮」の鎮は訓ではしずめと読み、平安や抑制を意味する語である。そこには書き手の心を鎮め、文の乱れを抑えるという用具としての機能を越えた寓意がひそんでいるのである。

文鎮とそれを含む「書」という東洋文化独自の世界に「鉄の点景」を探ってみる。



様々な形状の鉄製文鎮。

文房四宝

文鎮を語るにはまず「書」について語ることから始めなければならない。「書」は中国と日本が共有する特異な文化である。西洋にもカリグラフィーといって、「書」に類するものはあるが、これはいわゆるレタリングの世界であって、東洋の「書」とは似て非なるものである。「書」の芸術性は形が複雑で意味を持つ象形文字を西洋なら絵画に使う毛筆で描く点にあり、そこに抽象絵画とも相通ずる造形的な美の世界が成立した。本家、中国の「書」はどちらかといえば楷書による直線的な造型が主流であるが、これを受けた日本では草書体が発達し、これがやがてかなもじの母型ともなり、和漢朗詠集などに見られるかな混じりの草書体による日本独自の流麗な「書」が定着した。中国の楷書が持つ主知的な構築性と日本の草書やひらがなに

発露される主情的な情緒性は、絵画や建築工芸などにも通ずる両国民族の芸術における基本的な傾向の相違を示すものであるといわれる。

「書」は、今日では芸術の一ジャンルとして特殊化してしまっていたが、もともとは文字を書くという実用の技術から発展したものであり、芸術であるよりは人間の教養のひとつであった。明治、大正の頃までは、筆や硯は多少教養のある人なら、その日常座右にあったのである。「書」が教養人のたしなみであったがために、「書」のための諸道具は人々にとって愛着と敬意の対象であった。「書」の用具を文房具と呼ぶのは、読書、詩作、書画の制作などを行う部屋がかつて文房（今日の書斎やアトリエ）と呼ばれたところから来ている。この文房具ということばは今日では学習用品や事務用品の意味で使われているが、本来の文房具は文房の環境を整えるための調度備品を

さす広い意味の言葉だった。

文房具の中で、「文房四宝」あるいは「文房至宝」、「文房四友」と称せられるのが筆、墨、硯、紙で、武人の刀、女人の鏡にも比すべき文人の魂として尊ばれた。用具に対するこうした思い入れは、日本の伝統的な技法に共通している。「剣」にせよ「書」にせよ、時とともに実用の技であるよりは精神修養のための求道的な色彩を帯び、それにつれて用具にも精神的な意味合いや拠り所が求められるようになった。「文鎮」に心や文のしずめの意味があるのも、このような特徴の現れである。

文房具にはこのほか硯箱^{ひっか}、筆架^{ひっせん}、筆洗、墨床^{けんびよう}、硯屏等、合わせて40種に近い優れた工匠が技を競った逸品があり、茶道の道具とも通ずる独自の世界を形づくっている。

「書」の脇役

さて本稿の主角、文鎮は、文房具の中ではやや脇役の観がある。文鎮は、紙鎮、鎮紙、書鎮とも呼ばれ、文字を書くときの紙や帛^{はく}（絹の布）、あるいは書を読むときの開いたページのおさえである。文鎮は文房にある小物で代用がきく性格のものであり、文房四宝のような専用の道具として使われるようになったのが果たしていつ頃からなのか、確かな史料はない。後世、文鎮が使用されるようになってからも、中国では代用品として銅製の印などの古器を使い、日本では刀の鐔や矢立などなどが好んで使われていた。

そもそも、文鎮の必要が生じたのは、人が文字をはじめて布や紙に書くようになった頃からに違いない。東洋における文字の最古の出土例は、中国の古代文明の跡、殷墟（BC3100～3400年）から発掘された陶片や甲骨片であるが、陶片文字は陶片に彫りつけた凹字であり、甲骨文字は朱を盛り上げた凸字で、ともに文鎮の必要性はない。殷に続く周の時代になって帛に文字が書かれるようになって、文鎮の必要も生じてきたと想像されるが、常用される専用具が存在していたかどうかは詳らかでない。さらに降って漢の時代になると、墓（BC167年）から筆、墨、硯など5種類の文房具が発掘され、また、同時代の墓から動物繊維や植物繊維を混ぜて漉き込んだ紙も出土しているので、この頃からは文鎮も文房具の一つとして使われるようになったと推定される。

文鎮は文房四宝に比べれば古い時代のものが少なく、骨董品としてもやや脇役ではあるが、日本に所蔵される優れた製品をいくつか挙げれば、次のようなものがある。

伊達正宗が使った文鎮。墓所から出土した副葬品で、中央に竜形紐をつけた縁付き平板の青銅製。中国、明代のものともいわれる。さらに東京国立博物館の所蔵品には、磁製、銀製、銅製等各種の文鎮がある。「白磁色絵唐児偃形文鎮」と名付けられたものは、平戸藩主松浦氏の御用窯による平戸焼の磁器で、白磁に唐児の寝姿を色絵で焼きつけてある。銀製の



江戸末期につくられたとされる文鎮。花に蝶がとまっている姿をかたどるなど、その隅々にまで職人技術が活かされた作品となっている。

のものは、「簾に燕子花彫り文鎮」と「牡丹浮き彫り文鎮」の2つがあり、江戸末期の写実的で精巧な造りの鑄造品である。銅製には、「亀形文鎮」と「蟹型文鎮」があり、それぞれ栗原貞乗、全竜斎寿道という作家の銘がある。

遠ざかる鉄の点景

さて、文鎮の材料であるが、古い時代のものには紅玉、紫水晶、オニキスといったジェム・ストーン系のものが多く、芯に鉛をし込んだ紫檀など木製のもの、竹製、芯に銅や鉛を入れて漆で固めたものなどがこれらに次ぎ、銅、真鍮、鉄などの金属製品には古味のあるものは少ない。

実のところ刀の鐔等で代用した例は別として、鉄製の文鎮が一般に使われるようになったのは、明治時代になってからなのである。義務教育制が始まり、書道が正課として取り上げられるようになって、習字用具の需要は爆発的に高まった。文鎮を何かで代用するようなことでは間に合わなくなり、量産工業品である鉄の登場となったのである。初期の鉄製文鎮は、鍛冶屋や鋳物屋による鍛造・鑄造ままのものであったが、やがて軟鉄の角鋼を切断したものに変わり、さらにクロムメッキ等の防錆処理を施し、つまみをつけた学童用の普及品としての文鎮が定着、文鎮といえば鉄製品という時代になった。

一方、専門家や富裕な人々が求めた贅沢な鉄製文鎮は鑄造・鍛造により一品生産され、江戸時代から使われており、明治以降もこの流れにつながった南武鉄等の文鎮がつくられた。しかし、これらは一部の趣好品に過ぎず、量的には微々たるものだった。

さて現代、筆字で日常の用を足す人はまれになり、ワープロやパソコンの普及で自筆で文字を書く機会の少ない人すら増えつつある。進み行くデジタル化時代に抗して「書」のようなアナログ文化や趣味への興味の復活も見られるようだが、一部の懐古趣味の域を出でず、文鎮も小さな、鉄の文字通りの点景として私たちの日常から遠ざかりつつある。

●参考文献

- 「文具」細川謹貞編（木耳社）
- 「文房古玩事典」宇野雪村（柏書房）
- 「文具曼荼羅」岡田 譲、青山杉雨監修（毎日新聞社）

〔取材協力・写真提供：東京国立博物館、南部鉄器協同組合〕